

# Book Review

## 歯科衛生ケアプロセス実践ガイド

佐藤陽子・齋藤 淳 編著

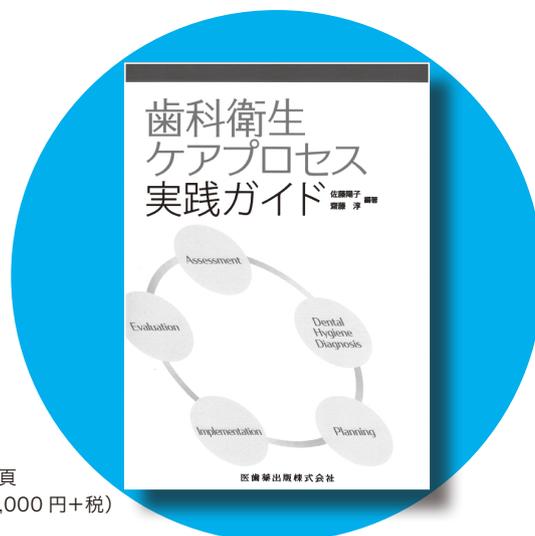


Reviewer

服部佳功 Yoshinori Hattori

(東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野)

B5判, 134頁  
定価(本体3,000円+税)  
医歯薬出版刊



歯科衛生士養成校の修業年限が3年以上に延長されたのは2005年であったが、遡って2001年、いち早く3年制に移行した養成校があった。本書編著者の佐藤陽子氏が教務主任を務める宮城高等歯科衛生士学院である。

来るべき時代の歯科衛生士養成カリキュラムの範を北米に求めたこの養成校は、教育の柱に「歯科衛生ケアプロセス」を据えた。彼の地の歯科衛生士は、業務に係る情報収集と診断、介入計画の立案と実施、結果の評価という一連の業務を自ら担う。この業務過程を定式化したのが「歯科衛生ケアプロセス」である。本邦の歯科衛生士が歯科医師の直接の指導の下に業を行うとしても、専門職種として自立を遂げるには一連の業務を自ら行う能力が欠かせない。それゆえにこそ今日の歯科衛生士教育で「歯科衛生過程」(この語は「歯科衛生ケアプロセス」の異訳である)が重きをなしているのだろう。佐藤氏や、当時教務部長であった齋藤淳氏の慧眼には、正直、驚きを禁じえない。2007年、両氏の編著で上梓さ

れた『歯科衛生ケアプロセス』は、まさに新時代の歯科衛生士教育の原典であった。

そして8年の歳月が流れ、歯科衛生士に対する社会の要請は様変わりした。

国が進める地域包括ケアシステム構築の成否は、介護、医療、予防各領域の専門職種の働きと連携とに依っていて、当然ながら歯科衛生士にも応分の活躍が期待されている。この春の介護保険改正で施設入所者の経口摂取を支援する取り組みが多職種による食事観察と会議に改まり、それらに歯科衛生士等の職種が参加すれば加算が認められることとなった。食事観察を通じた食機能の評価や食形態の選択、食環境の整備は、どの職種の専門とも言い難い境界領域である。なればこそ多職種が顔を突き合わせて相談するのであり、専門性に基づく発言ができないならば会議に参加しても意味がない。いまや歯科衛生士たるもの、「歯科衛生ケアプロセス」が定式化する専門的機能を備えていて当然という時代である。

一方、8年という歳月は、舶来物の「歯科衛生ケアプロセス」が変容しつつ定着するのにも、十分な長さであったようだ。かつての生硬な概念は、今や日々の歯科衛生士業務を支える柔軟ながら強靱な骨格へと変貌した。本書を手にしてそのことを直下を感じたのは、たとえば「ヒューマンニーズ概念モデル」の項を読んだ折である。

本書は、もはや学生向けの教科書ではない。学生に優しい平易な記述ながら、一線で活躍する歯科衛生士の仕事への覚悟を新たにさせるような、そんな浸透力に満ちているのは、現場の感覚が随所で活きているからだろう。

佐藤氏は小柄な体いっばいにエネルギーを満たして活躍する魅力的な女性で、はじめこの本のイラストに登場する歯科衛生士にどこか似ていると思ったが、読了してこの本の印象が佐藤氏の印象そのものだと思うようになった。

良い本である。医院のスタッフ控室に本書一冊を備えられることをお勧めする。